



キャンパス／京都府京都市 学生数／6,327人
建学の理念／仏教精神により人格識見高邁にして、活動力ある人物の養成を目的とし、世界文化の向上、人類福祉の増進に貢献することを使命とする。
学部／仏教、文、歴史、教育、社会、社会福祉、保健医療技術、看護（2026年4月設置構想中）
大学院／文学、教育学、社会学、社会福祉学
THE 日本大学ランキング2025／201+位

教育機関として成長する大学への取り組み

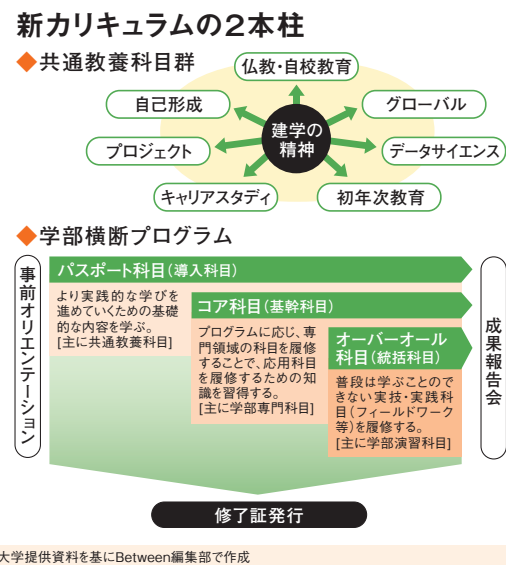
	Before	課題	After
質施策	▶「質保証検討委員会」を責任主体とする内部質保証体制。認証評価受審のタイミングで、自己点検・評価を実施 ▶「質保証検討委員会」とは別に、「自己点検評価委員会」が各機構、委員会からの報告を基に点検・評価	▶定期的な自己点検・評価ではなかったため、結果に基づく改善・向上が行われにくかった。各機構、学部・研究科等への支援のしくみも不十分で、内部質保証が有効に機能していなかった ▶複数の会議体が内部質保証に取り組み、責任の所在が不明瞭 ▶執行部中心で進めていたため、各学部が質保証を自分事化しにくかった ▶学部ごとの物の見方や思考パターン、文化の違いがあり、足並みがそろいにくかった	▶自己点検・評価を毎年実施。今後は毎年チェックするものと長期で見えるものに項目を仕分けして負担減を図る ▶評価や改善がしやすくなる形に、アセスメントプランの修正を検討中 ▶大学の活動の点検・評価は「質保証推進委員会」に一本化。執行部に加え、各学部・学科教員も参加 ▶学部・学科と執行部が時間をかけて対話しながら取り組む ▶既存の学生参画のしくみを内部質保証に取り入れる
教育改革・改善	▶既存のカリキュラムに対して、カリキュラムマップなどを整備	▶養成したい人材像や3つのポリシー、カリキュラムなどを社会の変化に対応させることが必要 ▶自学の学生の状況に合った学修者本位のカリキュラムへの見直しが必要 ▶学部によらない佛教大学としての全学的な出口保証 ▶キャリア教育の目的や成果が不明瞭	▶養成したい人材像や3つのポリシーの見直し ▶カリキュラムを見直し、養成したい人材像に基づき、佛教大学としての特色を強化。初年次教育やキャリア教育の充実、共通教養科目等の設置など（2026年度より開始） ▶学生の意見、提案を取り入れた教育環境の改善や、学生による授業支援

注 目

全学で目的意識の醸成と社会人基礎力を養成 意欲ある学生には、学部横断プログラムも提供

新カリキュラムの柱となるのが「共通教養科目」と「学部横断プログラム」だ。「共通教養科目」は、入学者の質の変化に対応。モチベーションが低下する学生、就活でアピールできる強みを見いだせない学生に対して、DPを素材にした本校教育や、学びの目的、姿勢を養う科目をそろえた。併せて、卒業後のキャリア形成に有用な社会人基礎力の養成も重視。行政や企業が抱える課題の解決に挑むプロジェクト科目群を置く。初年次教育やキャリア教育に不慣れな教員のために、教科書や指導書も用意される予定だ。

「学部横断プログラム」は、希望する学生に、テーマ*に沿って3年かけて多様な分野を学ぶ経験を通し、専門以外の視点を養うと同時に、教養の意義を感じてもらうことが目的の意欲的なプログラム。1年次には導入用の「パスポート科目」として共通教養科目を、2年次には「コア科目」として専門の基幹科目を3科目、3年次には、学びを統括する演習「オーバーオール科目」を履修する。「出口の質保証」のためには学修成果の自認が重要なので、成果報告会を実施するほか、修了者には就活にも使えるバッジを発行する。



*2026年度は「心と身体のマネジメントプログラム」「文化財・文学・GIS（地理情報システム）から読み解く京都」の2テーマを予定

質保証体制や学生の課題を直視、 ポリシーとカリキュラムを刷新

佛教大学

質保証や募集状況などの課題を前にして、今ある教育の質を地道に高める道に、課題解決の光を見いだした佛教大学。新体制を整え、新カリキュラムを打ち立てた。



副学長

貝 英幸

かいひでゆき ●1992年佛教大学大学院文学研究科日本史学専攻単位取得退学。2000年佛教大学文学部専任講師。同准教授、同教授を経て、2010年より歴史学部教授。歴史学部長を経て2023年より現職。

学生のキャリアの課題と大学の質保証の課題

本学は、人文社会系に加え、教育、社会福祉、保健医療技術の免許・資格系学部も擁する総合大学です。真面目な学生が多く、例えば、私が所属する歴史学部には歴史好きで向学心旺盛な学生が全国から集まります。反面、キャリア観に乏しく、適性がなくても親に言われるがままに教員をめざす学生や、就職活動で自己アピールがうまくできない学生も少なくありません。私は、専門教育だけでなく、自律的なキャリア形成に資する教育にも取り組むべきではないかという問題意識を持っていました。折しも本学は、2019年度の第3期認証評価受審時に、内部質保証に関しては正勧告を受けました。そこで、タスクチームをつ

くり、今後の大学の改革の方向性を検討。その結果、拙速に改組をするのではなく、まずは、内部質保証の実質化を図り、カリキュラムを学生のキャリア形成に役立つものへと見直し、実直に教育の質を追求することで、高校生に選ばれる大学にする道を選んだのです。まず、分散していた質保証の組織を整理し、「質保証推進委員会」に一本化。同組織下に「カリキュラム改革委員会」が設置され、私が委員長を拝命しました。メンバーは事務局長、学部長に加え、各学科から1人、学科の利益代表としてではなく、学部や大学全体の教育の質を考えられる教員にも参加してもらいました。これは、人文社会系と資格系の学部学科では足並みがそろいにくい事情を考慮してのものです。「カリキュラムを見直そう」と言うとき現場の教員は身構えがちです。そこで、あくまで既存の教育活動の延長にあり、その向上のためのものであることを説明し、現場のアイデアを生かすため、検討には時間をかけました。一方で、大学の決定事項は、本委員会からではなく、「質保証推進委員会」から各学部長に伝え、全学的な取り組みであると認識してもらう工夫もしました。

社会人基礎力養成重視のカリキュラムへと改革

2026年度から始動する新カリキュラムの目玉は、1年をかけて全学で共通の社会人基礎力を養成する初年次教育です。春学期にスタディ・スキルズ、秋学期にアカデミック・スキルズを扱い、まずは大学での学びの姿勢を育てます。初年次にはキャリア教育も含まれます。「自分の得手・不得手に合わせてキャリアを考えられるようになる」をコンセプトに、座学だけでなく、職業体験をするようなプロジェクト科目や、社会人基礎力のアセスメント結果を自分で振り返る授業なども行います。3つのポリシーも見直しました。人材養成の目的やカリキュラムと連動させるために、「質保証推進委員会」が直接担当。各学科が掲げる人材養成の目的をブレイクダウンしました。卒業後の伸びしろも考慮して4年目に到達すべき状態を想定し、高校生が読んでもわかる表現に。前文、後文も付け、評価についても丁寧に説明しています。改革の過程で広報に力を入れた結果、募集状況は回復し、近年は堅調です。この7年間取り組んだ質保証の実質化の成果をもって、次年度の認証評価に臨みます。

取材・文／児山雄介 撮影／望月小夜加